

「新収蔵資料展—まほろんのニューフェイスたち—」関連講演会

「中通りの中世遺跡を掘る」

『阿武隈川右岸の中世遺跡 郡山市徳定A・B遺跡の発掘調査成果』

公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査部 神林 幸太郎

『室町期南奥の御所と城館』

公益財団法人郡山市文化・学び振興公社大安場史跡公園 垣内 和孝

『中世都市梁川から見る伊達氏の権威形成』

伊達市教育委員会 今野 賀章

2025年11月15日

福島県文化財センター白河館

講演会次第

- 10:00 ~ 開場
- 10:30 ~ 10:40 あいさつ
- 10:40 ~ 11:40 講演「阿武隈川右岸の中世遺跡 郡山市徳定 A・B 遺跡の発掘調査成果」
講師 (公財) 福島県文化振興財団遺跡調査部 神林幸太郎
- 11:40 ~ 12:40 休憩
- 12:40 ~ 13:40 講演「室町期南奥の御所と城館」
講師 (公財) 郡山市文化・学び振興公社 大安場史跡公園 垣内和孝
- 13:40 ~ 13:50 休憩
- 13:50 ~ 14:50 講演「中世都市梁川から見る伊達氏の権威形成」
講師 伊達市教育委員会 今野賀章
- 14:50 ~ 15:00 質疑応答
- 15:00 閉会

阿武隈川右岸の中世遺跡 郡山市徳定 A・B 遺跡の発掘調査成果

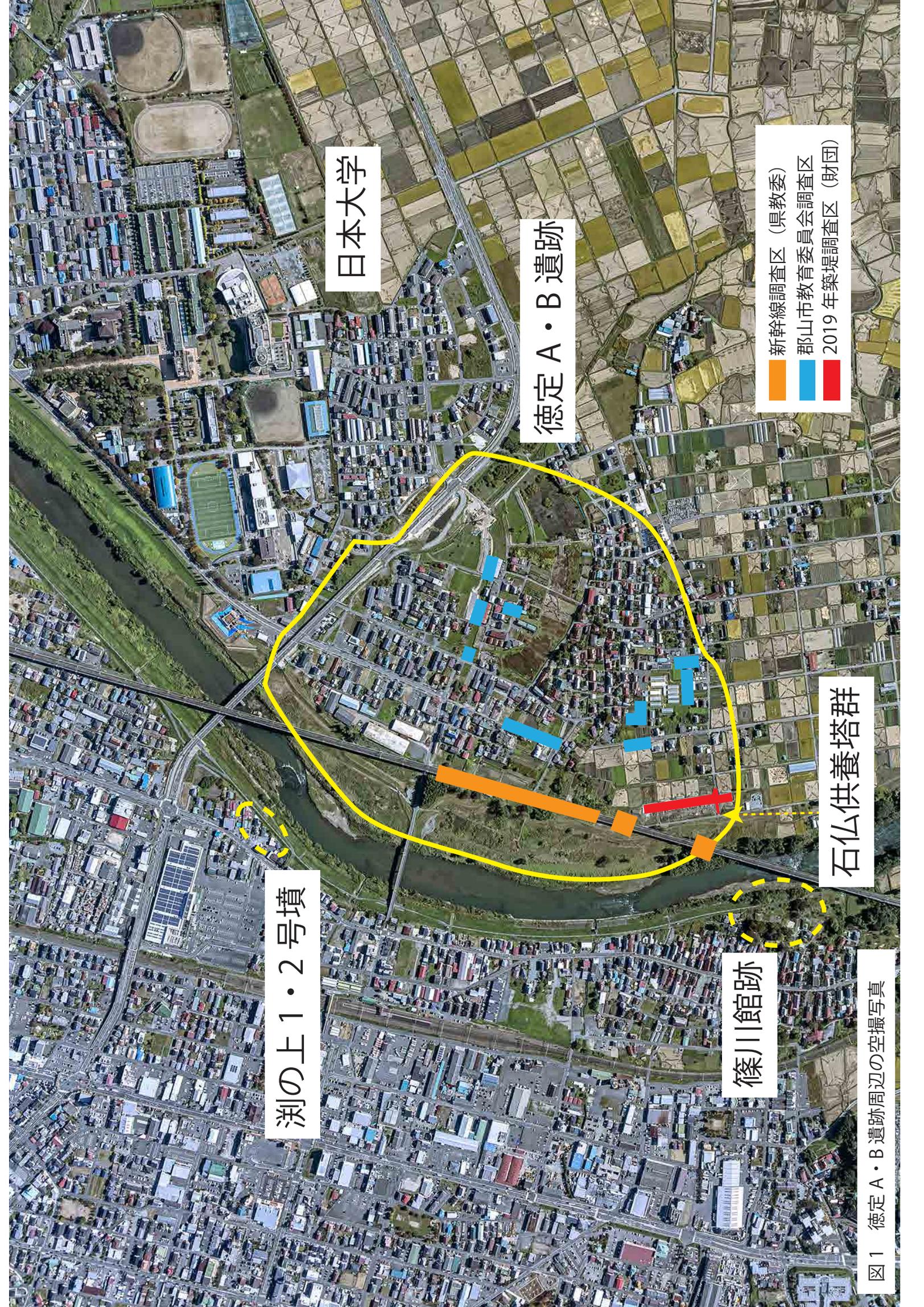
(公財) 福島県文化振興財団遺跡調査部

神林幸太朗

- ・ 徳定 A・B 遺跡とは
- ・ 令和 2 年度の調査成果
- ・ 確認された遺構
- ・ 出土した遺物
- ・ 鉄製獣足付手取釜について
- ・ 徳定 A・B 遺跡旧在の板碑

※福島県文化振興財団 2023 『阿武隈川上流河川改修事業 御代田地区遺跡調査報告 1 徳定 A・B 遺跡』福島県文化財調査報告書第 555 集





日本大学

徳定 A・B 遺跡

- 新幹線調査区 (県教委)
- 郡山市教育委員会調査区
- 2019 年築堤調査区 (財団)

石仏供養塔群

測の上1・2号墳

篠川館跡

図1 徳定 A・B 遺跡周辺の空撮写真

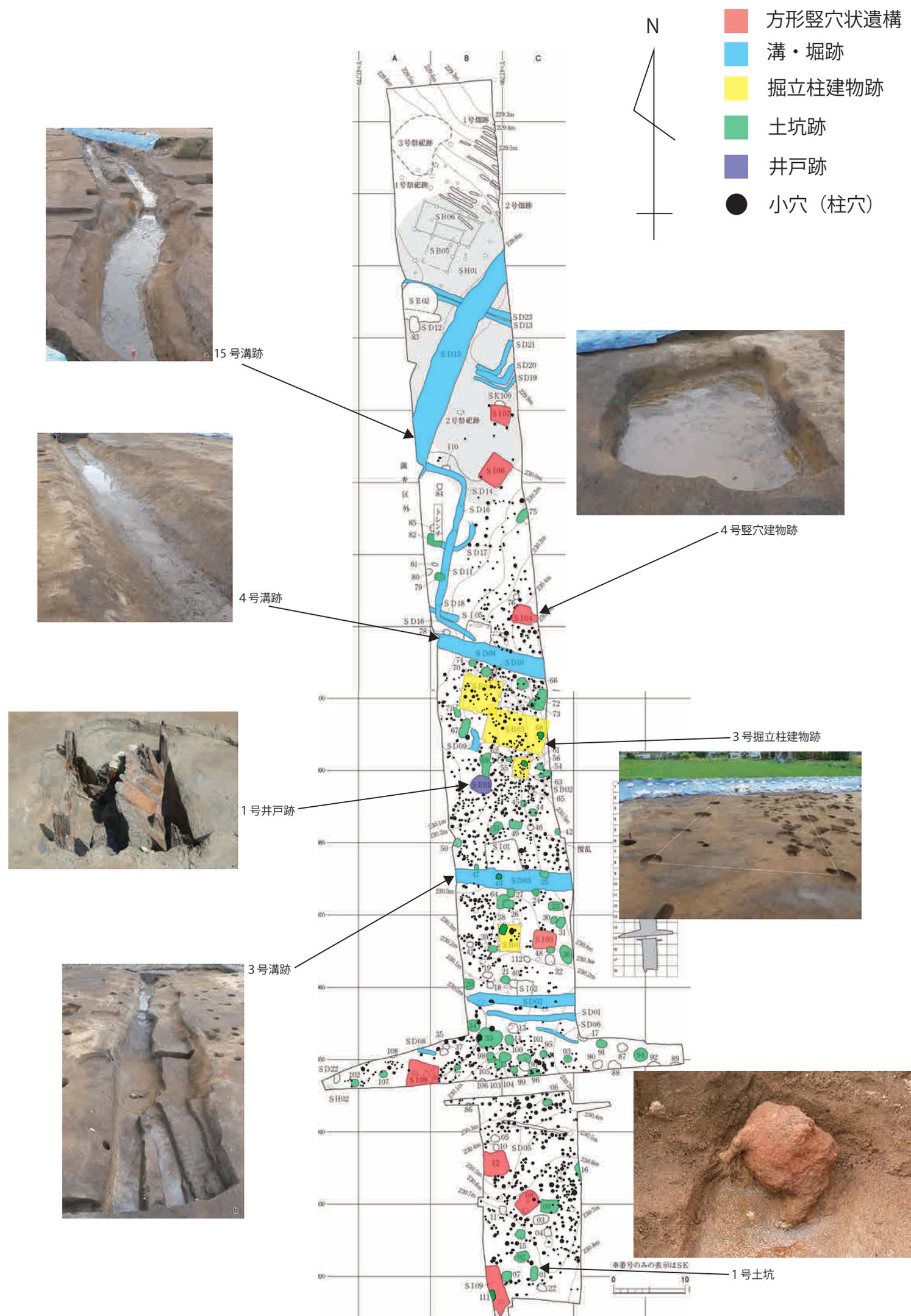


図2 徳定 A・B 遺跡 2019 年調査区全体図

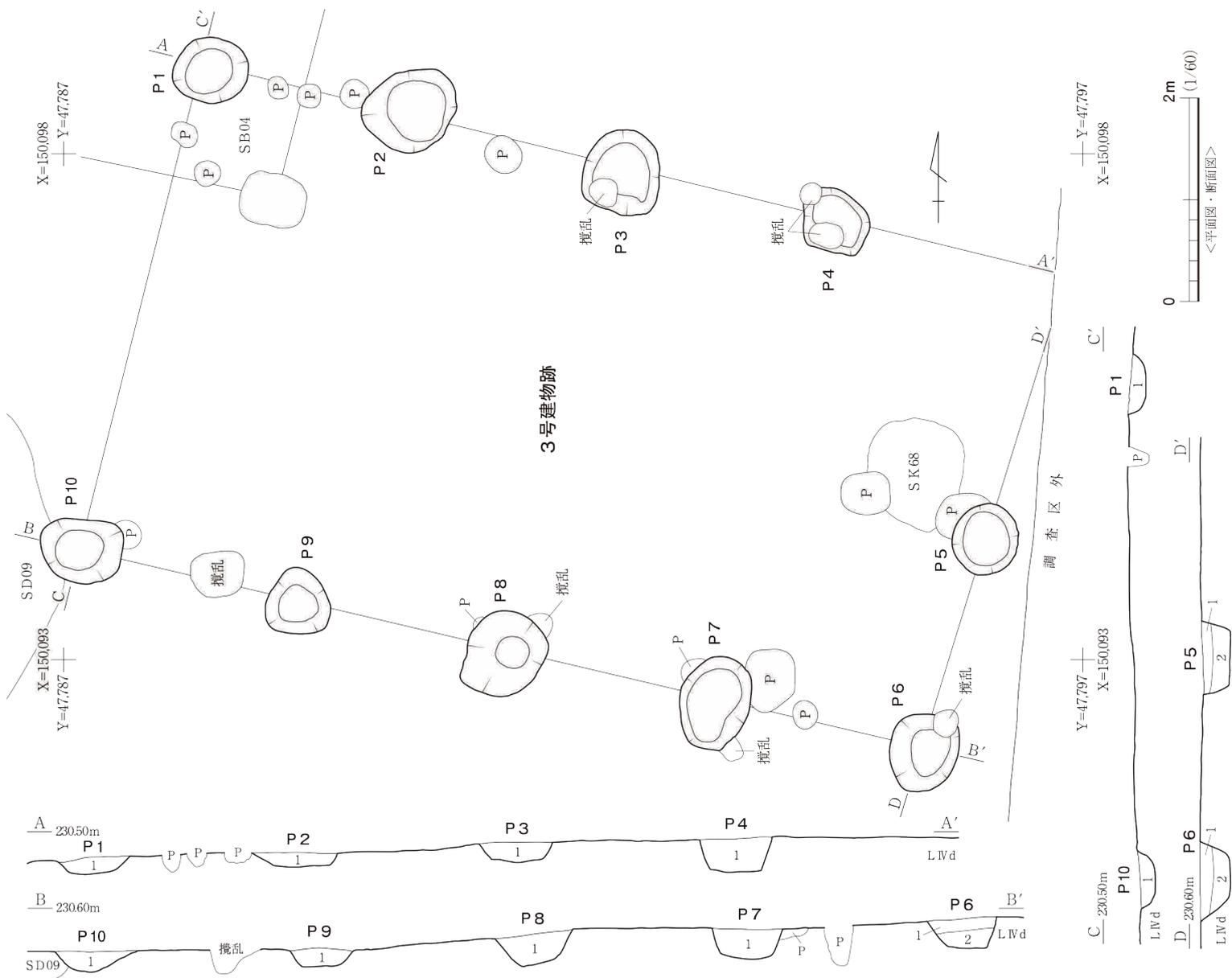
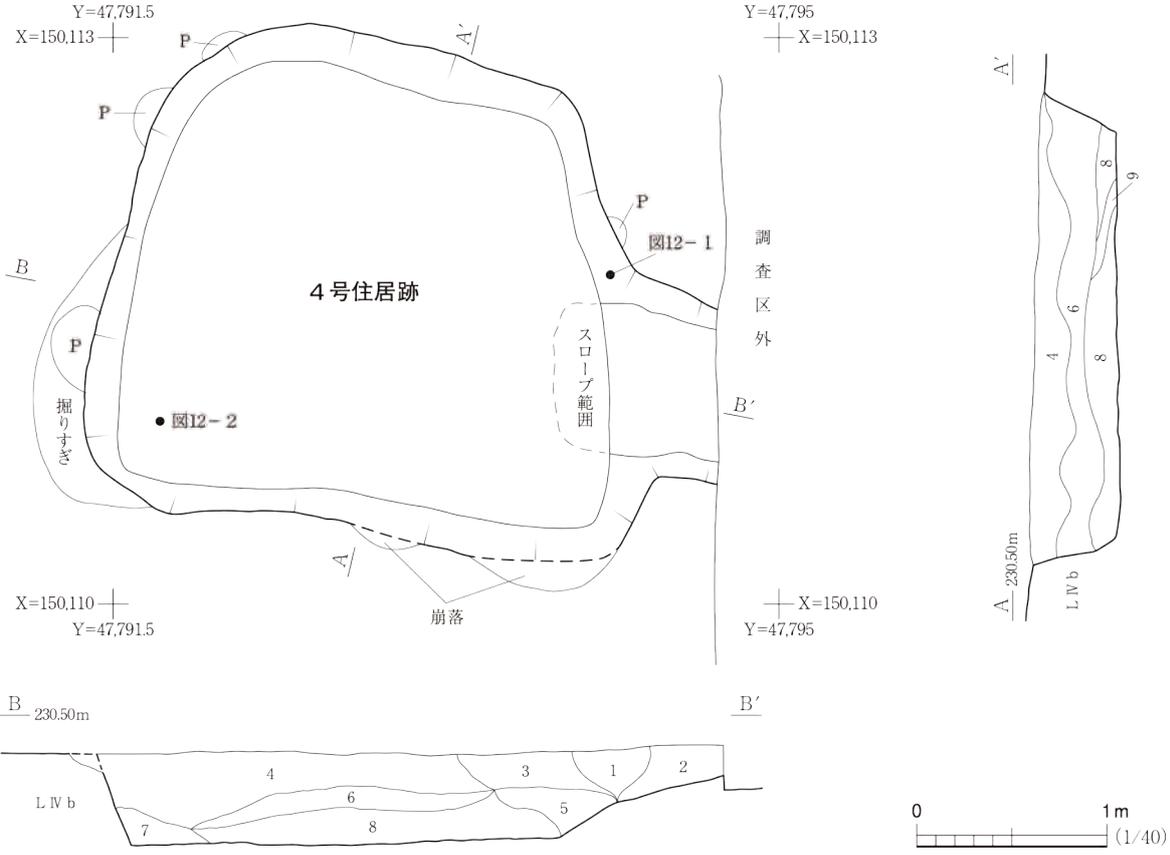


図3 徳定 A・B 遺跡で確認した中世の建物遺構（上・竪穴建物 下・掘立柱建物）

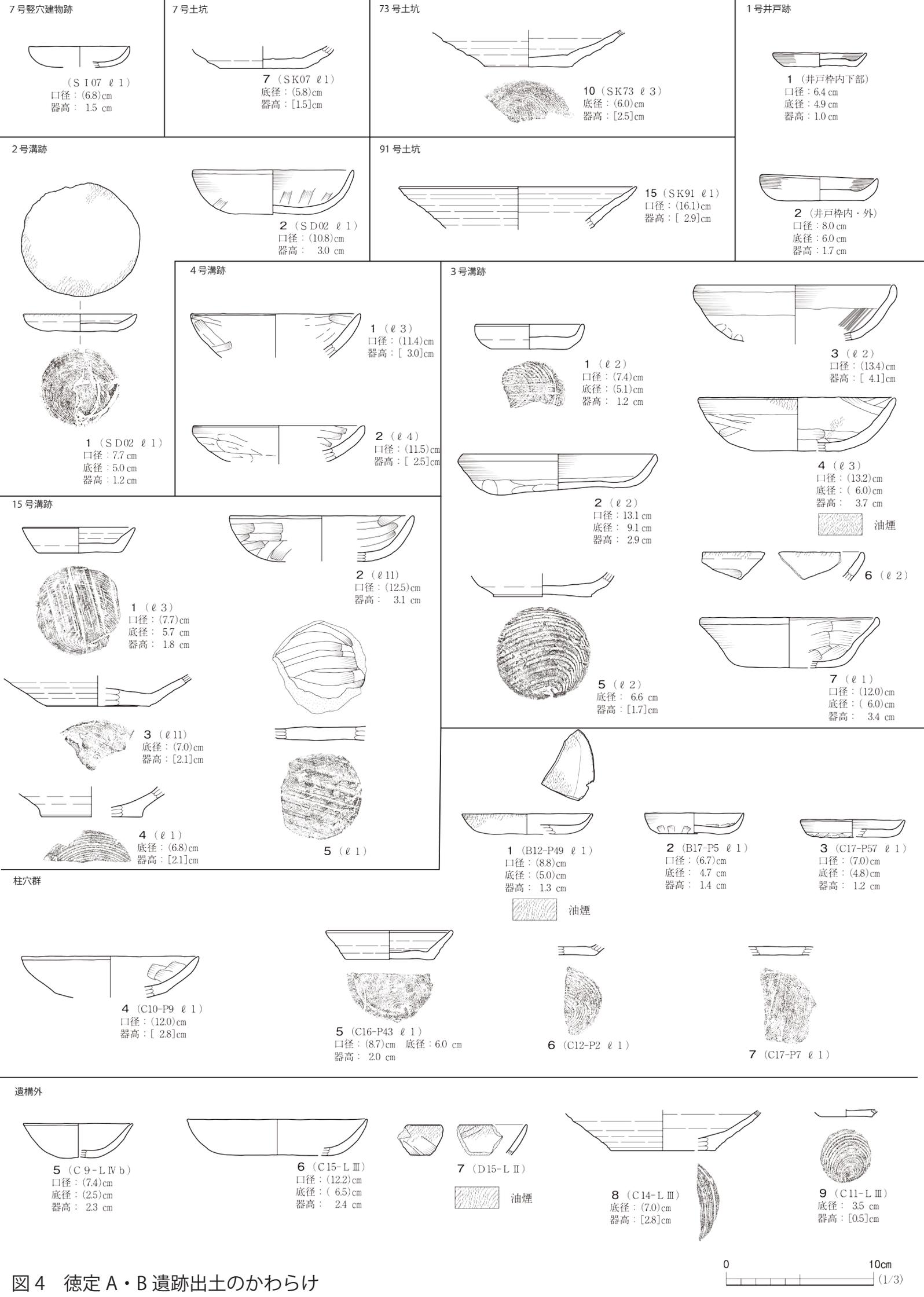


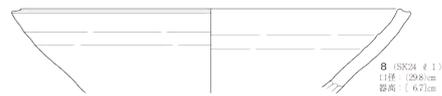
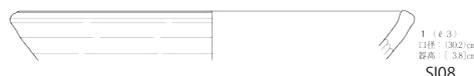
図4 徳定 A・B 遺跡出土のかわらけ

常滑焼 こね鉢

13 世紀前半



13 世紀前半



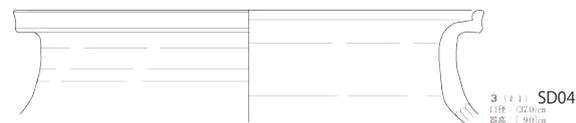
14 世紀前半



常滑焼 壺

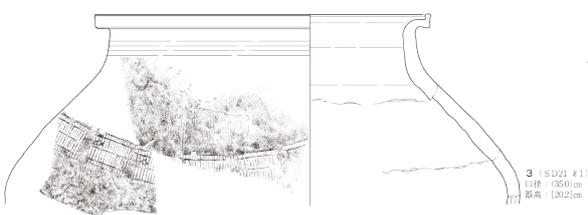


13 世紀中葉

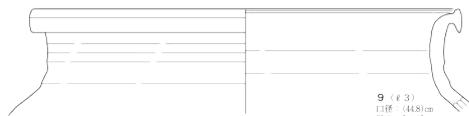


13 世紀後葉

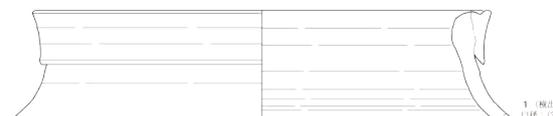
常滑焼 甕



12 世紀末葉～13 世紀初頭

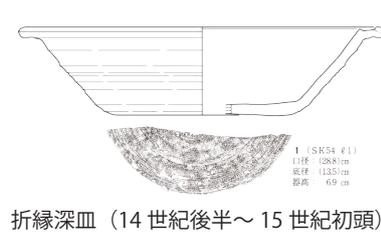
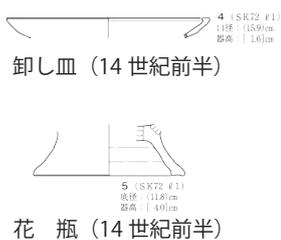


13 世紀後半～14 世紀前半

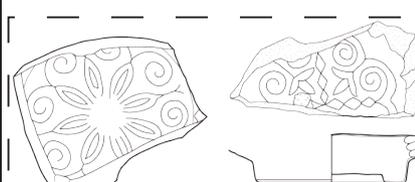
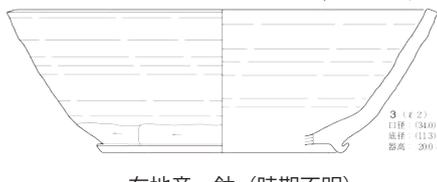
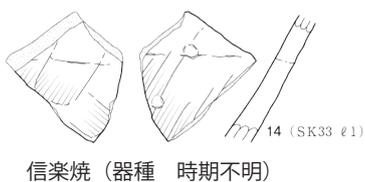
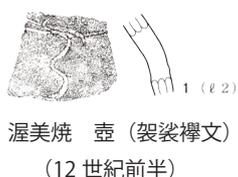


15 世紀前半

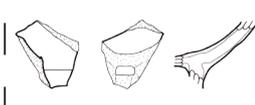
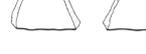
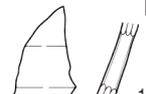
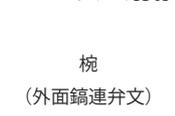
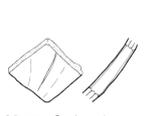
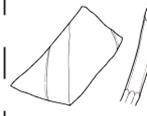
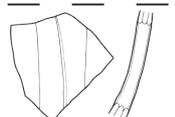
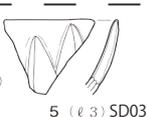
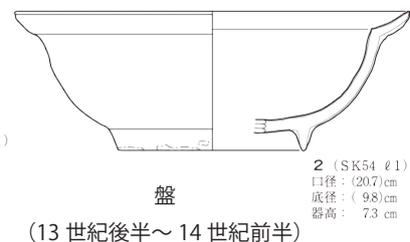
古瀬戸



その他



青磁



白磁

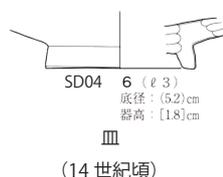
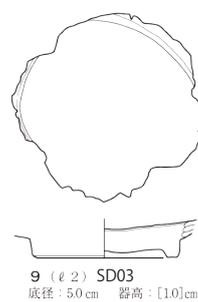
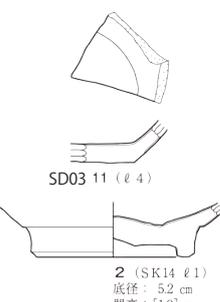
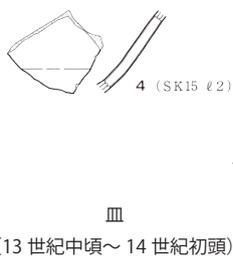
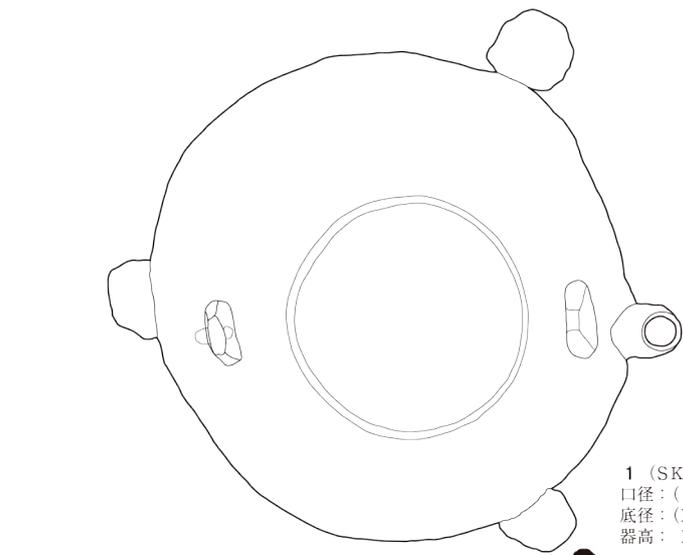
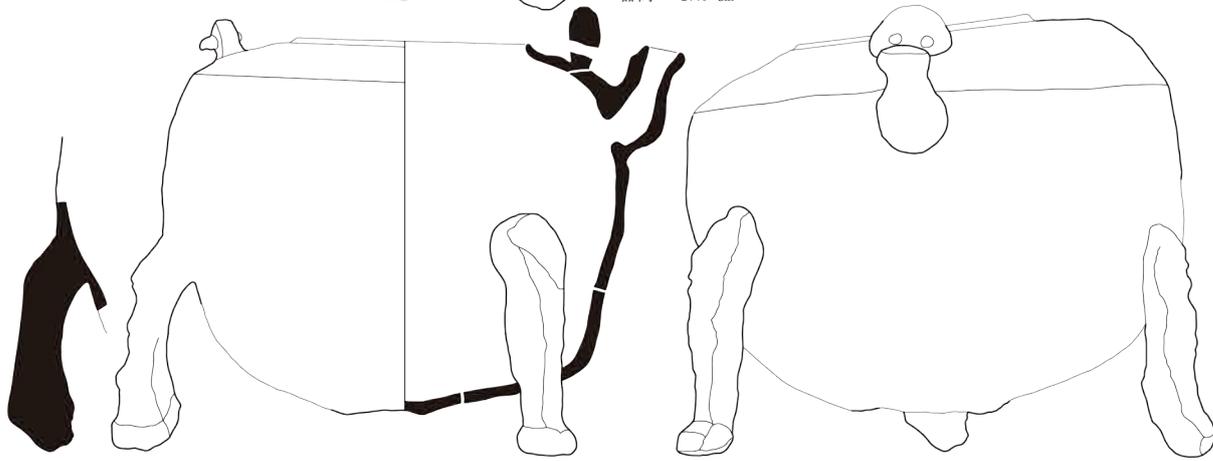
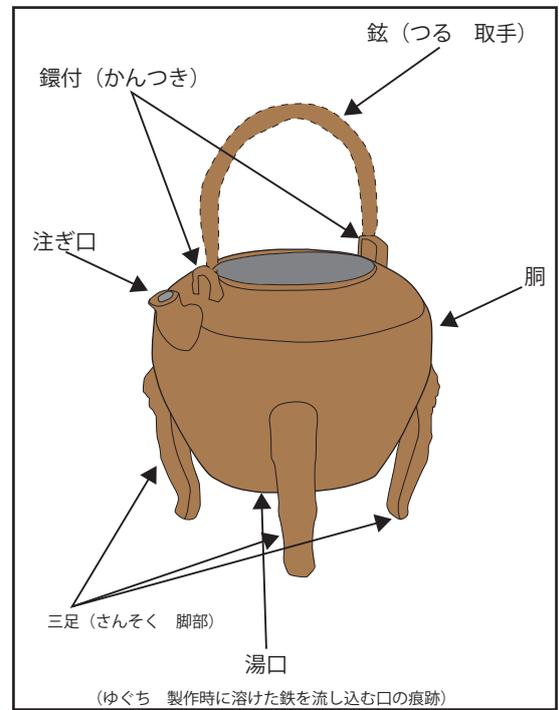


図5 徳定 A・B 遺跡出土の陶磁器類

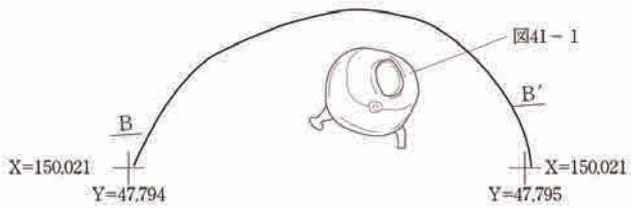


1 (SK01 04)
 口径：(9.2)cm
 底径：(11.0)cm
 器高：17.0cm

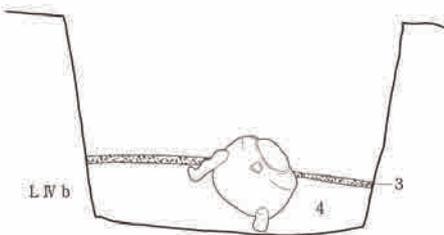


0 10cm (1/3)

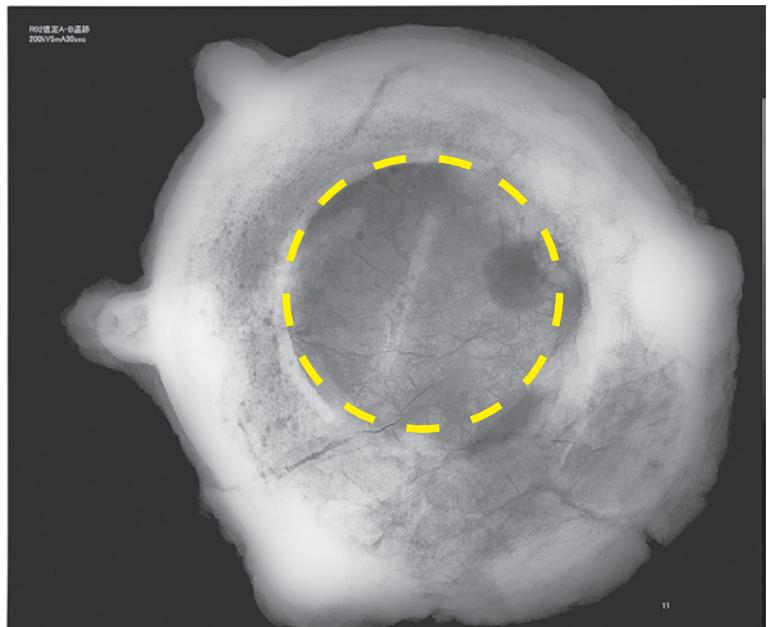
Y=47.794 X=150.021.5
 Y=47.795 X=150.021.5



B 231.00m



0 1m 1/80

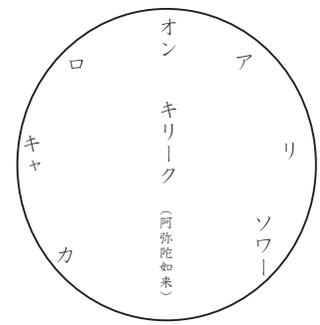


湯口の形状

図6 1号土坑出土の獣足付手取釜



嘉嘉曆二 卯丁 季肆月二十八日
(一三三七年)



右為法橋性公禪者頓成無上正覺

妻子珍宝及王位
臨命終時不隨者
四十八日称名忌
仏結衆百人
唯戒及不放逸
今世後世為伴侶



于建武二季 亥乙 肆月
(ハ) 大日如来

(一三三五年)

図7 徳定 A・B 遺跡に旧在した板碑 (御代田 甚日寺所在)

室町期南奥の御所と城館

垣内和孝

1 対立と共有

○京都将軍と鎌倉公方が対立。南奥ではその代理戦争。

鎌倉公方・稲村公方を支持する仙道国人一揆。

一定の距離を置く海道国人一揆。

○足利氏血統至上主義を共有するからこそその対立。

「上意」「公方」。

○文化的な統合 → 唐物嗜好。座敷飾の規範化。考古遺物。

寄合の文芸の隆盛(一揆と親和的)。

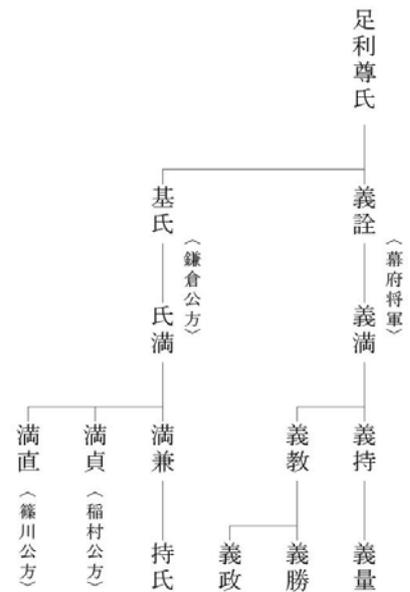
2 稲村御所と篠川御所

・稲村御所(須賀川市) …… 稲村公方足利満貞の居館。御所そのものは未調査。御所と推定される丘陵の南裾を発掘。「堀」を造成して屋敷地を形成。丘陵上には十分な広さの平坦面。現状の遺構は戦国

期の陣城と思われる。北辺には横矢の掛かる虎口。図1・2

・篠川御所(郡山市) …… 篠川公方足利満直の居館。現況の踏査で東西1町・南北1町半の御所を復元。周辺に屋敷地や寺院が展開と想定。図3

○足利氏連枝。「上様」の尊称。稲村・篠川両公方の尊貴性。



足利氏略系図

3 有力国人の本拠

・梁川城跡(伊達市) …… 伊達氏居館。中心区画である伊達氏館の遺構変遷を確認。長方形を志向した東西1町・南北1町半の規模。池庭の存在。基準となる道路を設定し、周辺に屋敷地や寺院を配した都市計画。豊富な出土遺物。図4・5

・白川城跡(白河市) …… 白川氏居館。山上の広い範囲に遺構・遺物が展開するも、時期により広がり異なる。室町期は中心区画と考えられる「御本城山」で遺構・遺物が比較的希薄。「御本城山」は平面方形基調カ。ただし規模は小さい。「居館型山城」。図6

○伊達氏・白川氏と並ぶ有力国人蘆名氏居館の黒川城は、会津若松城と重複し、詳細不明。

・新宮城跡(喜多方市) …… 新宮氏居館。蘆名氏に攻められ応永27年(1420)に落城。1町四方の規模。自然地形を利用した外郭との二重区画。豊富な出土遺物。図7

- 伊達氏の梁川城は御所に匹敵する規模と内容。
- 室町期に最盛期を迎えた白川氏の白川城で遺構・遺物が希薄な意味は？

4 御所周辺の領主居館

- ・須賀川城跡(須賀川市) …… 二階堂氏居館。主郭南辺の堀を発掘調査。主郭南西隅付近の土塁残存(二階堂神社)。櫓台カ。明治期の地籍図(福島県歴史資料館蔵)によれば方形基調で南北約1町。東西規模は不明ながら同じく約1町で、15世紀後半に規模拡大カ。治部大輔系から為氏系への惣領家の交代。図8・9
 - ・南古館跡(須賀川市) …… 二階堂氏庶流居館カ。方形基調。規模1町未満。図10
 - ・荒井猫田遺跡(郡山市) …… 「館B」は伊東氏居館カ。方形基調。規模1町未満。図11
 - ・安子島城跡(郡山市) …… 伊東氏庶流安子島氏居館。方形基調。規模1町未満。図12
 - ・日和田古館跡(郡山市) …… 伊東氏庶流部谷田氏居館。方形基調。規模半町。図13
- 両公方の御所周辺の岩瀬郡(須賀川市ほか)・安積郡(郡山市東部)には平面が方形基調の平地居館が多く、15世紀後半(戦国時代)以降の須賀川城を除き小規模。
- ◎足利氏を中心とした身分秩序や各々の政治的な立場が、御所・居館のあり方に反映。

5 戦国の時代へ

- ・猪久保城跡(小野町) …… 出土遺物から14世紀後葉～15世紀前半。出現期の「居館型山城」。地域の聖地と併存。戦乱はすでに始まっていた。新宮氏の没落(新宮落城)もその現れの1つ。図14
 - ・赤坂城(鮫川村) …… 白川氏の従属下にあった赤坂氏は、山城である赤坂城を取り立てる。篠川公方足利満直は赤坂氏の主張を支持し、白川氏を抑制。戦国末期には、上位者である佐竹氏が赤坂氏の山城を忌避。図15・文献史料
- 自立の主張として山城を取り立てる。「居館型山城」の出現。
- 永享12年(1440)、周辺国人に攻められ篠川公方足利満直滅亡。室町的秩序の動揺。
→ 篠川公方の滅亡後、国人の自立性が加速。戦乱の激化・恒常化。
15世紀後半における有力国人の戦国大名化・領域権力化。
- 白川城では、「御本城山」を含む全域で遺構・遺物が増加。「居館型山城」として機能。
- 平地居館の平城化 → 須賀川城の規模拡大。荒井猫田遺跡「館B」の馬出・障子堀。
- ◎室町時代にみられた身分秩序が薄らいでいく。戦乱。自立性。山城・平城。

〈主要参考文献〉

- 喜多方市教育委員会編・発行『会津新宮城跡発掘調査報告書』2008年。
- 郡山市文化・学び振興公社編『篠川館跡 試掘調査報告』郡山市教育委員会 2006年。
- 郡山市文化・学び振興公社編『日和田古館跡』郡山市教育委員会 2008年。
- 郡山市文化・学び振興公社編『荒井猫田遺跡 第16次発掘調査報告』郡山市教育委員会 2006年。
- 郡山市文化・学び振興公社編『荒井猫田遺跡 第17次発掘調査報告』郡山市教育委員会 2006年。
- 郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『安子島城跡』郡山市教育委員会 1993年。

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『荒井猫田遺跡 第14次発掘調査報告』郡山市教育委員会 2002年。
郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団編『荒井猫田遺跡 第15次発掘調査報告』郡山市教育委員会 2003年。
白河市教育委員会編・発行『白川城跡』2016年。
須賀川市編『須賀川城跡Ⅱ(加治町地点)』須賀川市教育委員会 2017年。
須賀川市教育委員会編・発行『稲村御所館跡・徳玄遺跡』2016年。
伊達市教育委員会編・発行『梁川城跡 総合調査報告書』2018年。
長沼町教育委員会編・発行『南古館Ⅰ』1988年。
福島県文化センター編『東北横断自動車道遺跡調査報告28』福島県教育委員会 1994年。
鮫川村史編さん委員会編『鮫川村史』第2巻 鮫川村 1996年。
白河市編・発行『白河市史』第5巻 1991年。
長沼町史編纂委員会編『長沼町史』第2巻 長沼町 1996年。
福島県編・発行『福島県史』第7巻 1966年。
梁川町史編纂委員会編『梁川町史』第4巻 梁川町 1993年。
飯村均・室野秀文編『東北の名城を歩く 南東北編』吉川弘文館 2017年。
飯村均・室野秀文編『続・東北の名城を歩く 南東北編』吉川弘文館 2021年。
垣内和孝『室町期南奥の政治秩序と抗争』岩田書院 2006年。
垣内和孝『中世城館と南奥戦国史』東京堂出版 2024年。
杉山一弥『室町幕府の東国政策』思文閣出版 2014年。
谷口雄太『中世足利氏の血統と権威』吉川弘文館 2019年。
村井康彦『武家文化と同朋衆』ちくま学芸文庫 2020年 初版1991年。

〈挿図出典〉

- 図1 『中世城館と南奥戦国史』より転載。
- 図2 『稲村御所館跡・徳玄遺跡』より転載・改変。
- 図3 『室町期南奥の政治秩序と抗争』より転載。
- 図4 『梁川城跡 総合調査報告書』より転載。
- 図5 『梁川町史』第4巻より転載・改変。
- 図6 『白川城跡』より転載・加筆。
- 図7 『会津新宮城跡発掘調査報告書』より転載・改変。
- 図8 福島県歴史資料館蔵明治期地籍図より報告者作成。
- 図9 『須賀川城跡Ⅱ(加治町地点)』より転載・トリミング。
- 図10 『長沼町史』第2巻より転載。
- 図11 『荒井猫田遺跡 第17次発掘調査報告』より転載・加筆・トリミング。
- 図12 『安子島城跡』より転載・改変。
- 図13 『日和田古館跡』より転載・トリミング。
- 図14 『東北横断自動車道遺跡調査報告28』より転載。
- 図15 『中世城館と南奥戦国史』より転載。

〈文献史料引用〉

『鮫川村史』第2巻。



图 1 稲村御所現況

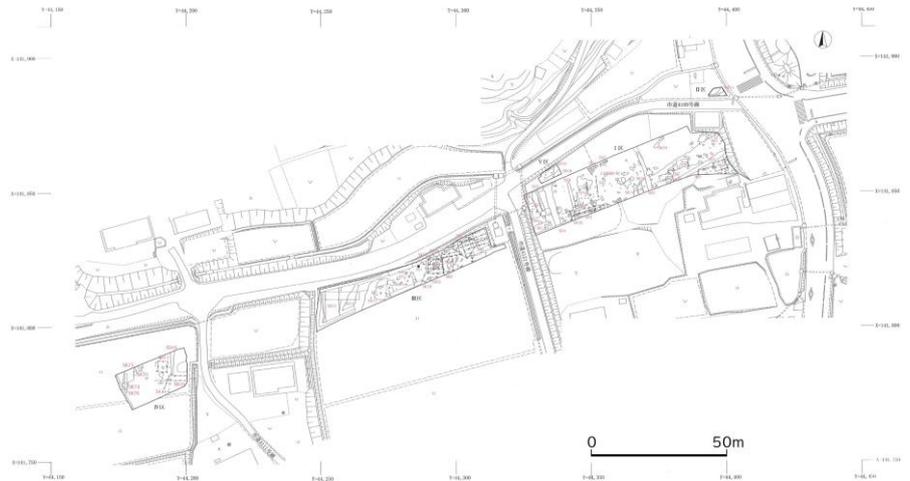


图 2 稲村御所館跡発掘調査区



图 3 篠川御所現況

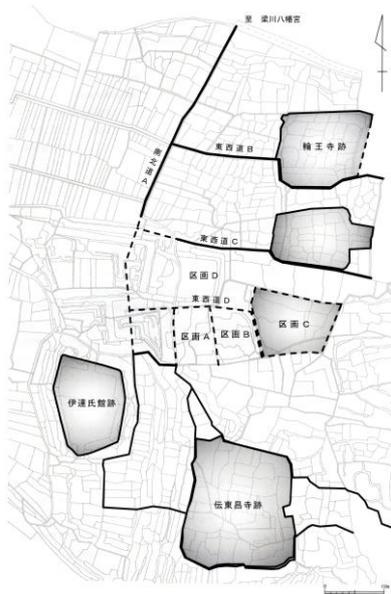


図4 梁川の都市景観

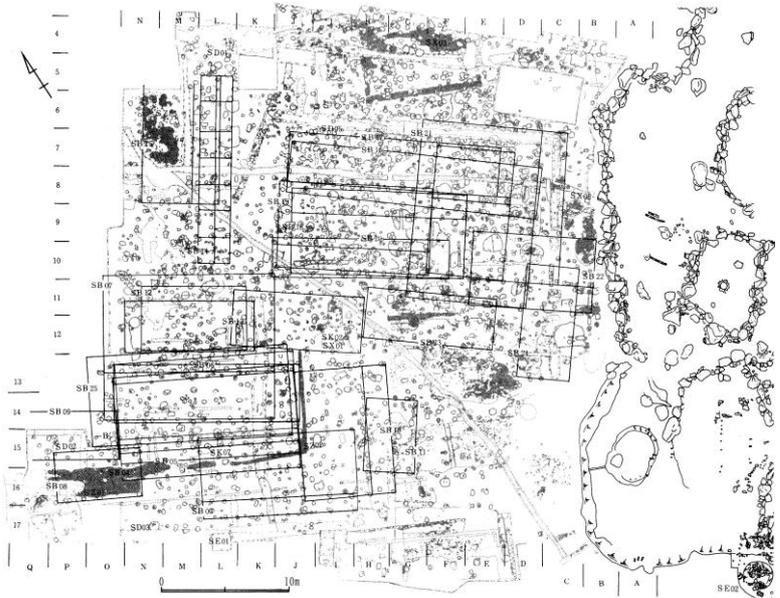


図5 梁川城跡本丸遺構配置

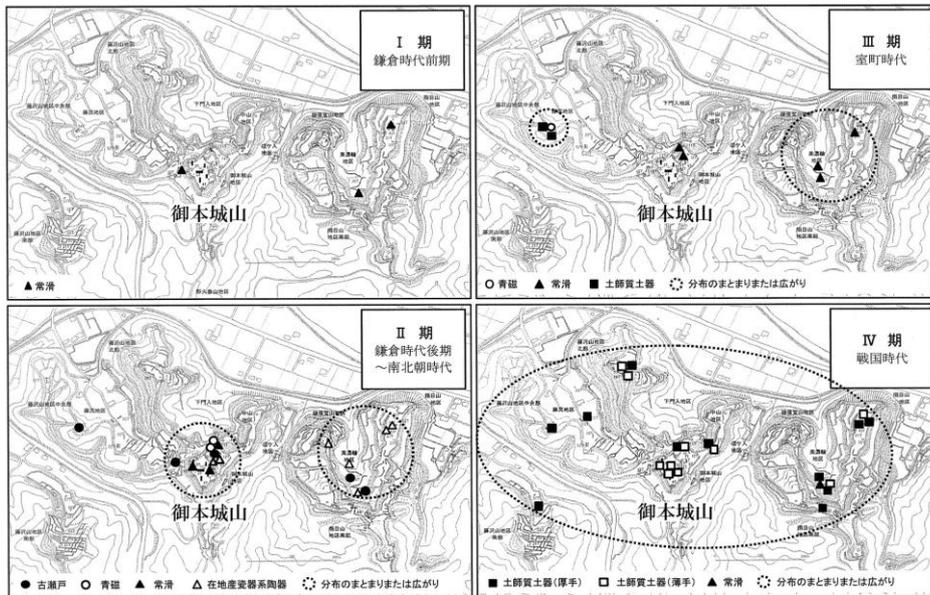


図6 白川城跡時期別遺物出土傾向

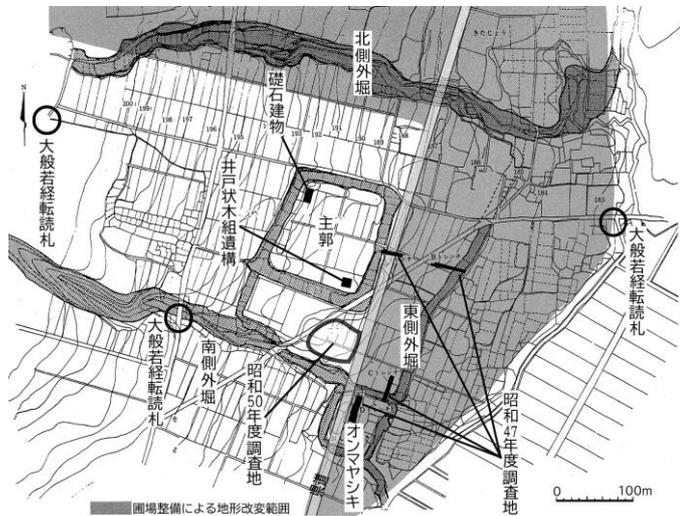


図7 新宮城跡



図8 須賀川城地籍図

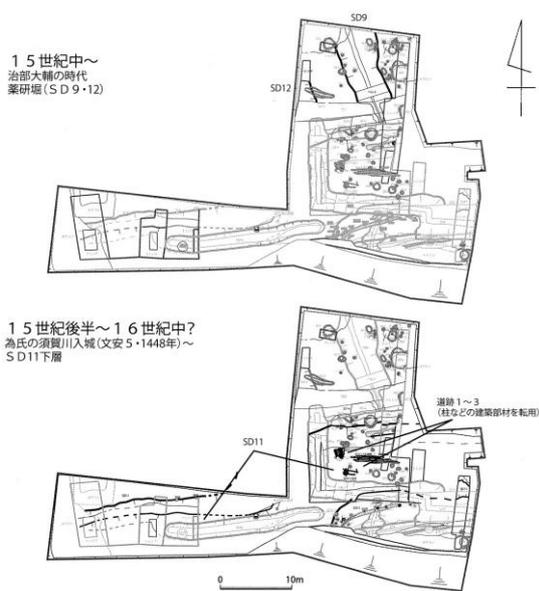


図9 須賀川城跡加治町地点遺構変遷

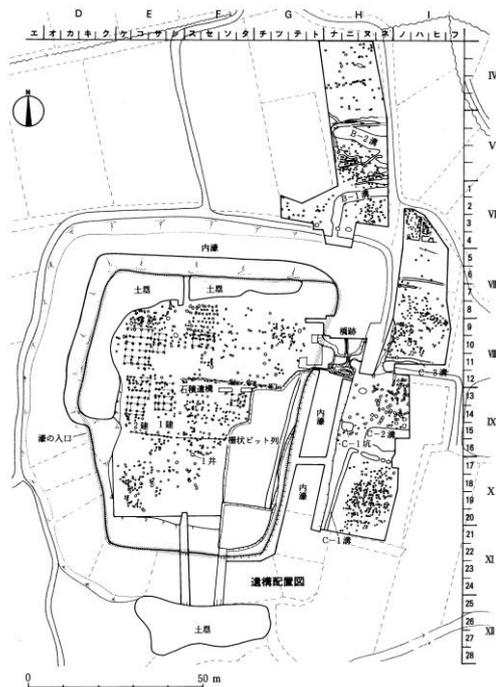


図10 南古館跡

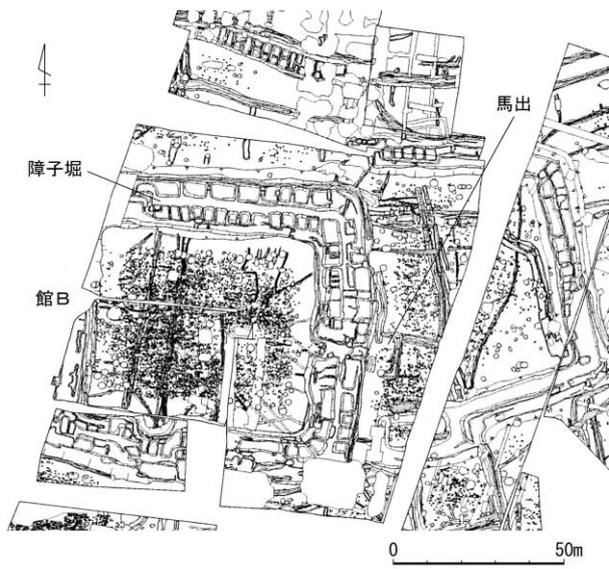


图 11 荒井猫田遺跡「館B」



图 12 安子島城跡

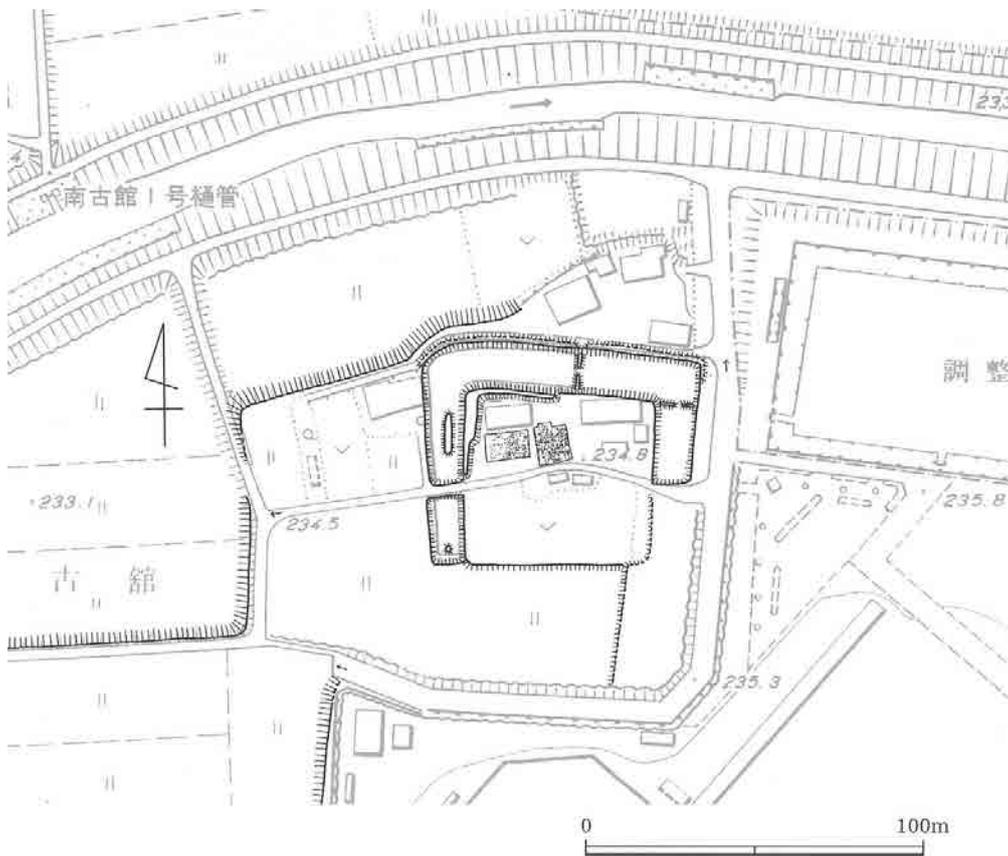


图 13 日和田古館跡

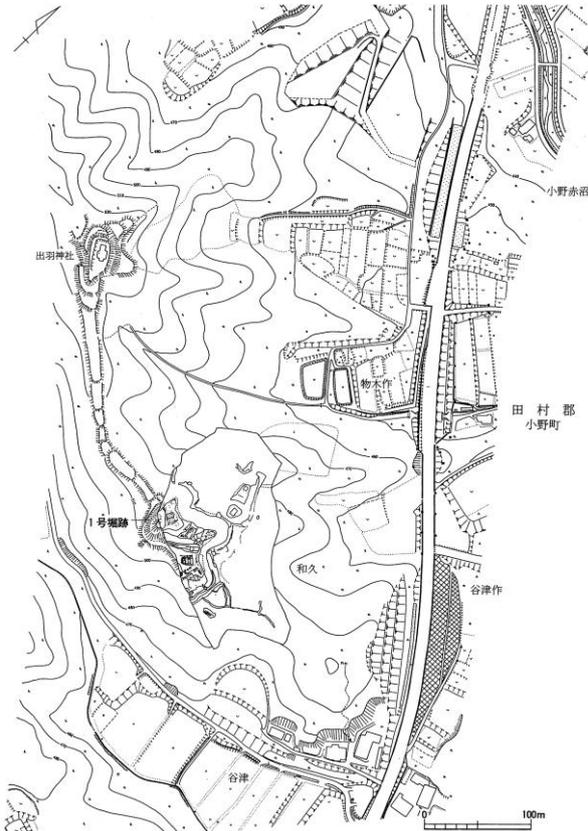


図 14 猪久保城跡

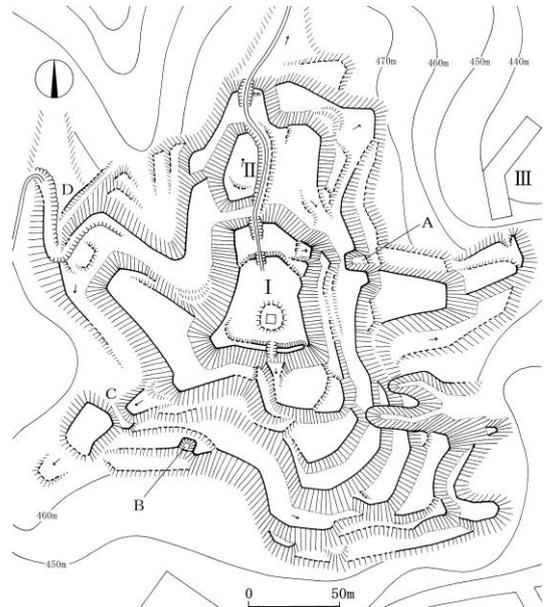


図 15 赤坂城現況

一〇六 民部少輔朝宗書状 秋田藩家蔵文書
赤坂忠兵衛光康家蔵文書

〔朱書〕
〔民部少輔朝宗書〕

御礼之趣令披露候了、就其

石川赤坂中間之事御申候、

此事者先日赤坂以状申

候様者、今度之大雨ニ城内崩

候間、更あるへき様も候ハす候、

仍本の城の山連の候を外

城之様ニ屋敷ニ調候て、愚息ニ

候者を、先可置之由申候間、尤

屋敷之様ニ被調候ハん事、如此申

候、可有子細候、但今程異なる様ニ、

新要害を被構候ハん事ハ、不可

然候趣被仰出候き、猶々外城之様ニ

調候て愚息ニ候者可置候、如何之趣

赤坂申候間、不可有子細由被仰出候、

事々敷様ニ候ハん事ハ不可然候歟、

此趣を可有御心得候由被仰出候、

恐々謹言、

十一月九日 民部少輔朝宗 (花押)

謹上 白川殿 御報

一七〇 佐竹義宣書状 秋田藩家蔵文書
赤坂忠兵衛光康家蔵文書

〔朱書〕
〔前書〕

今日廿八、うへさまより

如仰出者、寺山はくろ

はきやく申へきよし

にて御けんしを可被

遣よし候、其地なども

定而はきやくたるへく候、

其したく候へく候、

心へのためニ申届候、

はやく其方人

そくをもつてはきやく候て、

いつものことくおり

られしかるへく候、

恐々謹言、

七月廿八日 義宣 (花押)

赤坂下総守殿

中世都市梁川から見る伊達氏の権威形成

伊達市教育委員会 今野 賀章

1. 伊達郡と伊達氏

源頼朝による平泉藤原氏攻めに参戦した武士の中に常陸介藤時長（常陸入道念西）という人物がいました。時長は、平泉藤原氏攻めの中、最大の合戦となる阿津賀志合戦と並行して行われた石那坂合戦において武勲をあげ頼朝より伊達郡を賜ります。時長は、姓を藤原から所領を得た地名である伊達に改め、ここに仙台藩祖伊達政宗へとつながる伊達家が成立することとなります。時長の子息の内、次男為重と四男為家が、伊達姓を名乗っていることが『吾妻鏡』からわかります。時長と為重・為家は、伊達郡に入部し伊達性を名乗ったと考えられます。

伊達郡は、福島県中通り地方の最北部に位置します。西には奥羽山脈が南北に縦走し、東には阿武隈高地が所在しています。伊達郡は、これらの丘陵により形成された福島盆地内に位置し、盆地の中央には阿武隈川が流れています。現在のところ、この阿武隈川の西岸域を為重が所領し、東岸域を為家が所領したと考えています。伊藤喜良氏によれば、為重は、後の桑折氏の祖となったとの指摘があります。この為重系伊達氏は、伊達氏総領家を経てその後、南北朝時代末頃に没落し桑折氏へと転じていったとされます。これに代わり伊達氏総領

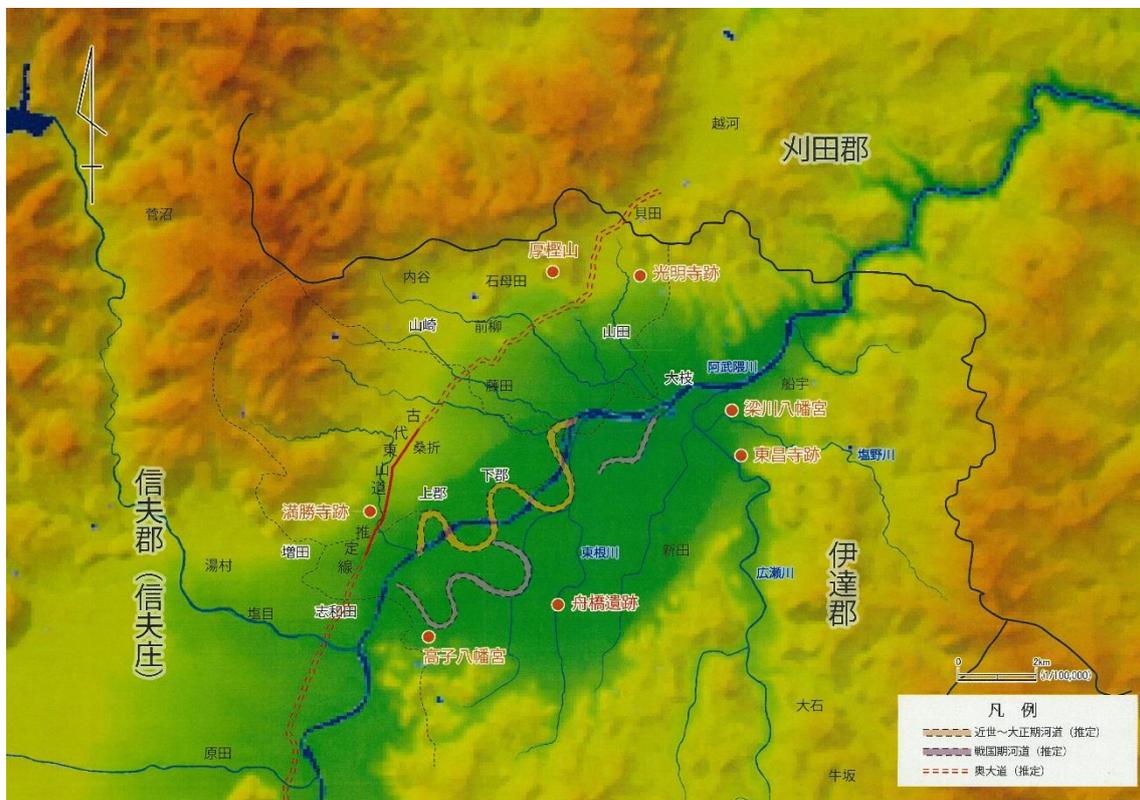


図 伊達氏の関連遺跡と寺院

家の座を獲得していったのが為家につながる伊達氏の系譜ではないかと私は考えています。そして、この系譜が、政宗－氏宗－持宗－成宗－尚宗－植宗－晴宗－輝宗－政宗(仙台藩祖)へとつながっていったと考えています。

2. 室町時代、伊達氏の館

室町時代になると伊達氏は、いよいよ本拠となる館を梁川へ設置します。この様子を梁川城跡の発掘調査成果が物語っています。庭園跡の復元整備を目的に昭和53年から実施された発掘調査では、主殿・会所・厩と想定される複数の建物跡が確認されました。また、庭園跡は、改修が加えられながらも作庭の時期は、室町時代であることが明らかにされました。その後、史跡指定を目的とした発掘調査では、館の規模が概ね120m四方であることが分かっています。庭園や各種建物跡の構成は、室町時代の将軍邸や将軍の補佐役となる管領邸などの館空間構成に類似点が認められることから室町幕府の規範意識が伊達氏館にも投影されていると考えられています。

このような状況は、出土品にも認められます。発掘調査では、輸入陶磁器(青磁酒海壺・盤、青白磁梅瓶、天目茶碗)などが確認されています。これらは、会所の床の間に飾られたり、茶席で使用されたものと考えられています。これらは、儀礼空間を設えるアイテムとなり、その価値観や使用方法についても室町幕府により創出されていきます。伊達氏もこの幕府の価値観に基づき館の建物を設えていった様子が出土品からも理解できます。

3. 中世都市「梁川」の原型

近年、堂庭遺跡の発掘調査により、梁川八幡宮の創建時期が明らかとなりました。その時期は、出土したかわらけの年代から13世紀中頃～後半と考えています。仙台藩がまとめた『伊達正統世次考』(以下、『世次考』)では、梁川八幡宮は、11代当主伊達持宗により創建されたと記されています。しかし、発掘調査により明らかとなった創建年代は、『世次考』の記録より100年程早い時期となります。13世紀中頃～後半に梁川八幡宮は創建されました。これにより、梁川八幡宮を中心に八幡宮地区の原型が形作られたものと考えています。延宝(1673～1681)の頃、菅野神尾守より落合藤九郎に提出された「梁川富野八幡宮由緒覚」には、「若宮、弁財天、仁王堂、釈迦堂、経堂、鐘撞堂」といった堂舎が記され、弘治4(1558)年頃の「八幡宮祭礼規式」には、「宗徒中之事」として「千住院 南野坊、竹之下 中野坊、滝本坊 坂上、和泉坊 杉本坊、発心坊 塔別当」などが記されています。八幡宮の周辺には、多数の堂舎が建ち並び、周辺には多くの坊院が展開していた状況が読み取れます。このような景観は、13世紀後半頃から形成され八幡宮地区の原型が形作られていったものと考えられます。中心地区では、梁川城跡(伊達氏館)・輪王寺跡・茶白山北遺跡・茶白山西遺跡の調査が実施されています。出土品の概ねの傾向としては、伊達氏館内で12世紀の「かわらけ」が確認されているほか、茶白山西遺跡・輪王寺跡では、13世紀代の「かわらけ」が確認されています。しかし、これら鎌倉時代の出土品は極わずかであり、多くの

出土品は、主に 15 世紀～16 世紀前半のものとなります。茶臼山西遺跡は、伊達家筆頭寺院とされる東昌寺に比定される遺跡となります。東昌寺は、弘安 8（1285）年頃に伊達政依により創建されたとされ、文保元（1317）年～嘉暦元（1326）年頃とされる北条高時の公帖の存在から 14 世紀前葉には、官寺として機能していたことが指摘されている寺院です。また、貞和 4（1348）年頃とされる吉良貞家の書状には、「奥州伊達郡東昌寺 今者安国寺」とあり、南北朝期には東昌寺は、安国寺として機能していました。安国寺は、夢想疎石の勧めにより足利尊氏・直義が南北朝の動乱による戦没者慰霊及び国家の安泰を祈願し設置した寺院です。しかし、発掘調査の成果から見えるのは、14 世紀末頃世から梁川において機能を開始する東昌寺の状況です。出土量が極わずかですが、輪王寺で 13 世紀後半～14 世紀と考えられる「手づくねかわらけ」が確認されている点や茶臼山西遺跡から 13 世紀後半頃の「ロクロかわらけ」が確認されていることを踏まえ、13 世紀後半から梁川八幡宮と中心地をつなぐ南北道が整備され、これが中世都市梁川の原型となった可能性が考えられます。尚、初期東昌寺の創建の地については、延宝年間（1673～1681）に作成されたとされる宮城県図書館蔵の「桑折西山城絵図」に東昌寺跡とあり、茶臼山西遺跡・茶臼山北遺跡から鎌倉期の遺物がまとまって確認されていないことから或いは桑折西山城周辺に創建された可能性も考えられます。これを前提に考えた際には、梁川の本拠移転に伴い東昌寺は阿武隈川東岸域へ移転されたこととなります。

4. 発展する都市「梁川」

鎌倉後期以降、整備が進められた梁川八幡宮地区を都市の原型とし、14 世紀末頃から中心地区の整備が更に進められていった様子が発掘調査の成果から明らかとなっています。14 世紀末頃に梁川の地に整備された東昌寺の状況を梁川高校グラウンド造成時に採取された瓦片が物語ります。この工事の際に採取された半截菊花唐草文軒平瓦は、14 世紀末～15 世紀初頭に位置づけられるものとなります。瓦類は、ほかに平瓦・軒丸瓦・丸瓦・鬼瓦・塙が出土しています。このことは、伊達政宗・氏宗の代に東昌寺の改修が進められた事実を示します。伊達氏は、伊達家筆頭寺院であり陸奥国安国寺でもある東昌寺の改修に着手し、伊達氏総領家としての権威創出を図ったものと考えられます。また、この東昌寺の改修が、室町期の都市梁川整備の嚆矢となったと考えています。

東昌寺の整備と並行して行われたのが、伊達氏館の整備です。伊達氏館は、概ね 120m 四方の規模を測り、その内部には、主殿・会所・厩と目される建物のほか、庭園跡が配置されました。この様な遺構の構成状況から伊達氏の館は、室町幕府の規範意識を取り入れた館構成となると考えられています。また、伊達氏館の造営は、出土遺物の状況から 14 世紀末～15 世紀前葉に始まったと考えています。この時期の当主は、氏宗或いは持宗となります。その後、応永 33（1426）年に梁川八幡宮の再整備、嘉吉元（1441）年には、持宗の祖母となる蘭庭明玉禅尼の願いにより輪王寺を創建しています（『世次考』）。持宗により実施された梁川の都市整備は、輪王寺の創建をもって一つの区切りとなったと考えられます。東昌寺

の改修から始まった都市整備の状況を伊達氏館や輪王寺跡・茶白山西遺跡の調査成果が物語っています。

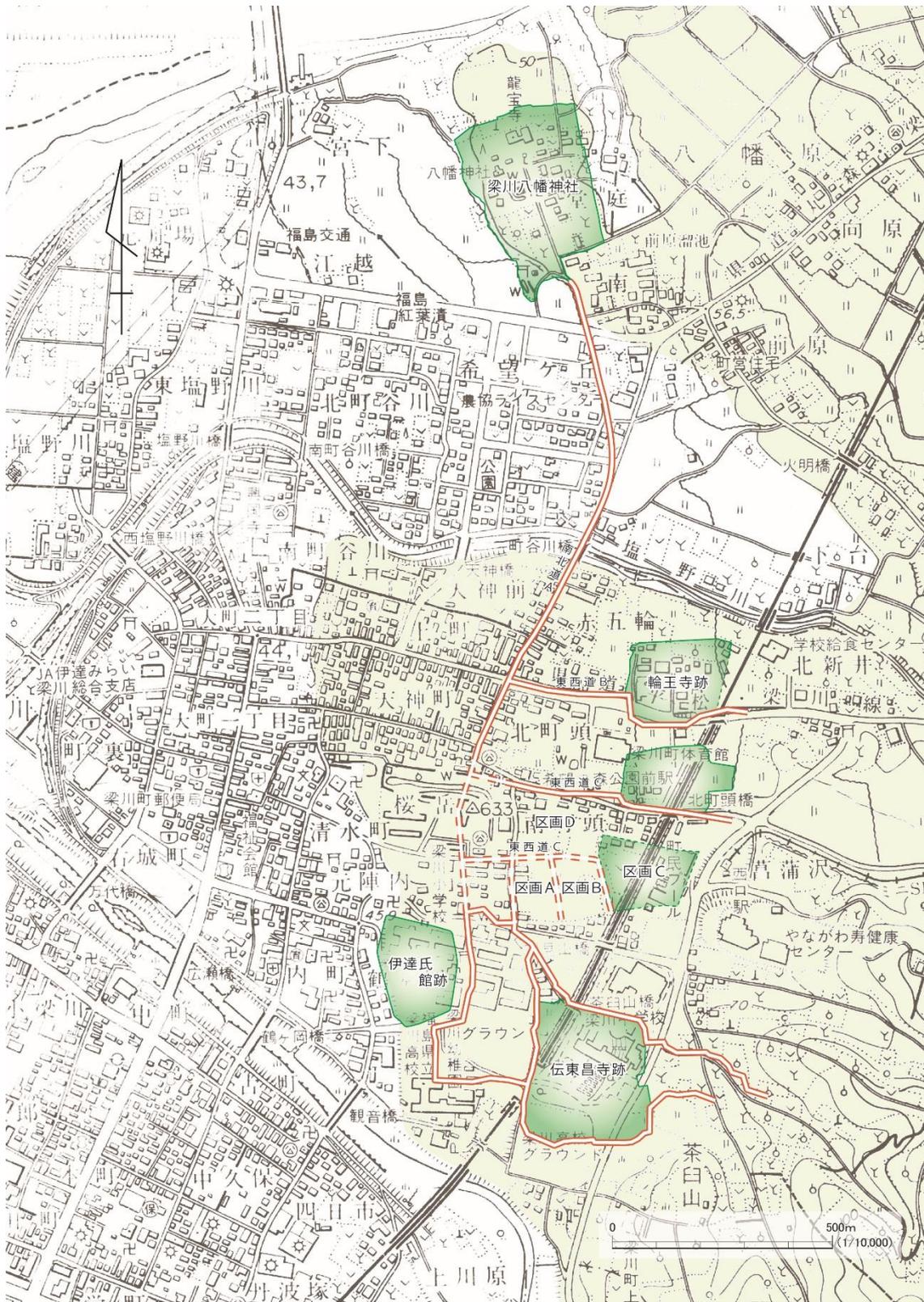


図 中世都市梁川の構造

5. 伊達植宗と桑折西山城

桑折西山城は、奥羽山脈山麓に築かれ、その眼下には、福島盆地が広がります。桑折西山城跡周辺には、天文元（1532）年に梁川より移された八幡宮跡（八幡阿部館跡）や輪王寺跡、伊達家初代常陸入道念西の菩提寺とされる満勝寺（下万正寺遺跡）など、中世伊達氏に関連する遺跡が多く所在しています。

桑折西山の名が記録に現われるのは、天文五（1536）年に制定された伊達領国内の分国法となる『塵芥集』の中です。この中に「道のほとりにて見つけ候拾い物のこと、西山の橋本に札を立て」とあり、落し物は、西山城下、産ヶ沢の橋の袂に置くことを定めています。また、『世辞考』では、天文元年に亀岡八幡宮が西山に遷ったことが記されており、これらの記録をから桑折西山城の築城もこの頃と推定しています。そしてこの桑折西山への本拠移転を実行したのが伊達植宗でした。

伊達植宗は、大永二（1522）年、陸奥国守護職に補任され、その後、精力的に領域経営の強化を図った人物となります。天文4（1535）年には、税の徴収者を決め各家一軒ごとの税を取りまとめた『棟役日記』を制定し、翌年には、分国法となる『塵芥集』を制定しました。また、天文7（1538）年には、田畑の面積を調べた『段銭帳』の製作も行っています。領内での法制度を整備し、税の徴収システムを整えるといった植宗の意欲的な内政強化の政治姿勢を読み解くことができます。また、奥州探題である大崎氏や隣国の国人領主（相馬氏、蘆名氏、二階堂氏、田村氏、懸田氏、葛西氏など）と姻戚関係を結び外交政策の礎も築きました。この様な時代背景の中、伊達植宗により築かれた守護館が桑折西山城となります。

桑折西山城跡は、本丸・二ノ丸から成る区画（以下、区画A）と中館・西館から成る区画（以下、区画B）で構成されると考えています。それぞれの区画は、方二町程の不正な方形を呈する区画で構成されています。内部の構造は、本丸のみ明らかとなっており、本丸内部には会所あるいは主殿と目される東西4間、南北3間で四面庇を持つ建物が確認されています。現段階において建物跡等の詳細など不明な点は多い状況ですが桑折西山城跡は、二町四方の二つの館が並列する形で構成されているものと考えています。具体的には、伊達植宗と伊達晴宗の館が並列する形で造営され二つの権力が並列する構造を採ったものではないかと考えています。

桑折西山城跡の出土品は、区画A（本丸・二ノ丸）の主なものとしては、青磁（盤・碗）、染付（皿）、瀬戸大窯（碗）、陶器（古瀬戸祖母懷茶壺、越前鉢、東北諸窯産甕）瓦質土器（風呂・火鉢・播鉢）、かわらけなどが確認されています。また、石製品では、茶臼の出土が確認されています。区画B（中館・西館）の主な出土品は、青磁（盤・碗）、染付（皿）、瀬戸大窯（皿）、陶器（古瀬戸祖母懷茶壺、越前甕、東北諸窯産甕）瓦質土器（火鉢・播鉢）、かわらけ、石製品では茶臼（下臼）などが確認されています。区画A出土品の時期は、15世紀後半から16世紀に位置付けられ、区画B出土の出土品の時期は、14世紀後様から16世紀に位置づけられます。

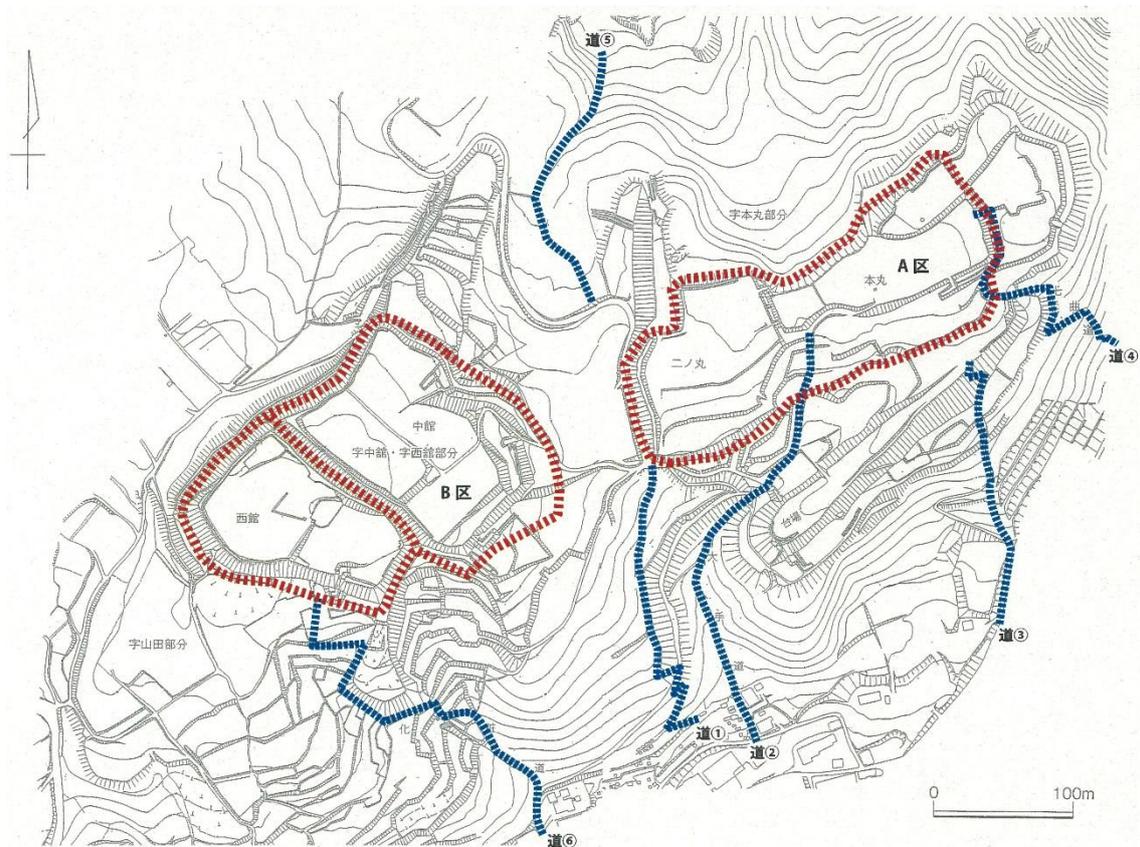


図 桑折西山城跡の構造

6. おわりに

室町幕府が成立し、各国には守護が配置されました。守護は、徐々に多くの権限を獲得し、領国の支配を強めていくこととなります。室町時代は、幕府と守護が互いに依存しあいながら守護が次第に自立化し地域支配を強めていった時代ともいえます。しかし、この東北の地（陸奥）に守護が置かれることはありませんでした。伊達氏は、鎌倉府が自立化を進める中で、幕府との関係性を梃子として自身の権威創出と自立化を果たしていくこととなります。この伊達氏の様子が、整備・拡充されていく都市梁川の姿に表れています。そして、この伊達氏の動向は、結果として先例のない伊達植宗の陸奥国守護職補任という結果へつながっていくこととなりました。しかし、植宗が獲得した守護権力とは、領国内の国人領主と強固な主従関係を結び一円支配を達成することにはつながらず、実質的には、緩やかな同盟的關係の中での盟主的な存在に留まったものと考えています。それは、あたかも室町期をとおして南奥に権威を保った奥州探題の姿と重なり合うように感じます。そして、このような状況にこそ南奥の特色が表れているように感じています。守護不設置とされ求心的な権威の創出を疎まれた地域的特色から、大名権力の存在を容認しない構造が形作られた結果と考えられます。植宗は、梁川館を放棄し、桑折西山への移転を実行しました。この行為には、このような南奥の状況を変え守護大名権力の獲得を目指した植宗の姿勢が表れていると捉えています。

引用・参考文献

- 1985 梁川町 『梁川町史 5』
- 1991 飯村 均ほか 『茶臼山西遺跡・輪王寺跡』 梁川町文化財調査報告書第 14 集
- 1996 梅宮 茂 「梁川の宗教」『梁川町史 1』 梁川町
- 2005 飯村 均ほか 『茶臼山北遺跡』 梁川町文化財調査報告書第 19 集
- 2006 飯村 均 「中世・梁川のイメージ」『陶磁器の社会史』 桂書房
- 2008 小林清治 「鎌倉期の梁川地方」『戦国大名伊達氏の研究』 高志書院
- 2014 杉山一弥 「篠川公方と室町幕府」『室町幕府の東国政策』 思文閣出版
- 2015 白根靖大編 『室町幕府と東北の国人』 吉川弘文館
- 2022 石本弘・今野賀章ほか 『堂庭遺跡・岩地藏遺跡総合調査報告書』 伊達市教育委員会
- 2023 伊藤喜良 『伊達植宗—奥州王への夢—』 高志書院